

臨死体験における時空の相対性

齊藤 忠資

アインシュタインの特殊相対性理論によれば、すべての物質にエネルギーを加えて加速させても、光速に近づくほどエネルギーは質量に変換されるので、その物質の質量は増大し、光速になるとその物質の質量は無限大になる。無限大の質量をもつ物質を加速させるエネルギーは存在しないので、すべての物質は光速に達することは不可能である。このことは光速が質量を備えたすべての物質の速度が乗り越えることができないバリアであることを意味している。事実すべての物質を構成する粒子を加速器で加速しても、光速に近づくが光速を乗り越えることはない。1) また光に向かって猛スピードで進むと、光のドップラー効果を生じ、観測者はトンネルの先にある光に向かって暗いトンネルを通過するように見えるという現象が起こる。さらに特殊相対性理論によれば、光自体には時間と距離というものはないので、光速に達し光と同じ状態になったものには、時間と距離というものはない。

臨死体験には共通した一連の出来事がみられる。それは光によって自己のエッセンスが肉体から解放されると、光のトンネルに吸い込まれた自己のエッセンスは光に引っ張られて、トンネルを猛スピードで通過し、トンネルの先にある光の世界に到達するというものである。臨死体験のコアは光である。そこでこの論文では、臨死体験の光と特殊相対性理論の光速不変の原理との関係を考察してみたい。

I 自己意識のエッセンスのみが光の世界に到達

すでに述べたように特殊相対性理論によれば、質量を備えたすべての物質は光速というバリアを超えることはできない。このことは M.H.Niemz が言うように、物質はいくら大切なものであっても光速のバリアを超えて光の世界にまで持つてはいけないこと意味している。2) 肉体は物質から作られており質量を備えているので光と同じ状態になることはできない。臨死体験者も自分の肉体を含めてすべて物質は死後何も残らないと知っている。典型的な例を挙げよう。

「肉体の死後残るものは、エネルギー、愛、人格性、知識だけである。物質はどんなに価値のあると思うものでも、肉体の死後は持つていけない。」3)

「ここには何も無い。ここには物質的なものは何も無い。ここには意識だけがある。自分の身体はなく、ただ意識だけがある。自分の意識とは別にもう一つの巨大な意識だけがある。その意識はすべての意識の集合体のようなもので、全体意識と呼んでもいい。自分はこの全体意識の一部なのだ。」4)

しかし静止質量がゼロのものであれば、光子と同じなので光速まで加速され、光と同じ状態になることができる。5) 自己意識のエッセンスは物質ではなく質量を備えていないので、光速にまで加速することができるものと考えられる。6) 自己意識のエッセンスが情報のパターンであれば、7) 例えば名曲の楽譜（情報）があればCDやレコードやテープといった異なる素材で再現できるように、またコンピューターの情報のみを他のコンピューターに伝送できるように、光は自己意識のエッセンスのみを情報パターンとして肉体から抽出し、肉体とは別の未知のエネルギー体に移し替えることができよう。臨死体験では多くの場合自己意識のエッセンスが脳を通じて肉体から抜け出すといわれている。

II 自己意識のエッセンスには質量がない

臨死体験では自己意識のエッセンスは肉体から離脱した後は、トンネルの中を通過中も光の世界でも一貫して無重力状態にあり浮動している。

- ① 肉体から離脱直後、自己意識のエッセンスは重さがなく空中を浮動している。代表的な例を挙げよう。

「私はプール上20フィートくらいのところに浮揚していた。重さはまったく感じなかった。」8)

「体外離脱後、私は重さがなく空中を浮動し瞬時に至る所に存在した。」9)

「自動車事故後私の新しい体は物質的なものを何も備えていなかった。私の新しい体は重さをもっていなかった。」10)

「体外離脱後病院のフロアを通過して、病院の屋根の上に私は押し上げられた。」11)

「驚くほど美しく明るいブルーの空のほうへとゆっくりと斜めに上昇して、晴れ渡ったグリーン谷を私は見た。」12)

- ② 自己意識のエッセンスは、暗いトンネル内を無重力状態で浮動し猛スピードで飛行している。典型的な例を引用しよう。

「真空がトンネルを形成し私は真空内を浮上した。私は光速か超光速で飛行した。」13)

「トンネル内を飛行中私は無重力状態であった。」14)

これらの2例は、無重力状態と猛スピードで飛行することが互いに関連しあっていることを示している。

「トンネルは真空のクリーナーのようで重力作用はなかった。」15)

- ③ 自己意識のエッセンスは光の世界でも質量がなく無重力状態で浮動している。代表的な例を挙げよう。

「私の両足は動いていない。私は浮動していた。」16)

「私は美しい園の上を歩くのではなく空中を浮動した。」17)

「光の世界では我々は肉体的に歩いたのではなく、地上の空間を浮動した。」18)

「私が草の上を歩いて足跡を残さなかった。」 19)

「光の世界では人々の体は重さがないようだった。私の体には重さがないようだった」
20)

光の世界には重力はないのですべてのものが浮動する。

「光の世界では生きているものは歩くのではなく浮動する。」 21)

「光の園の花は空中浮動して移動した。落下することはなかった。」 22)

Ⅲ 光の世界とバリア

特殊相対性理論によればすでに述べたように、光速は質量を備えているすべての物質をこえることのできないバリアであるが、臨死体験者にとっても光の世界はバリアになっていて、体験者は例外なく光の世界に入り光と一体になると、二度と地上の肉体に戻れなくなるから戻るようにと告げられている。典型的な例を引用しよう。

「私はこの光に達する直前に、私が光の中に入ると地上に戻れなくなることが分かった。」 23)

「光は境界線であり、光に到達する前に私は戻るように言われた。私は光に到達する前に地上に戻った。」 24)

光と一体になり同質になると地上には戻れないことが分かり、地上に戻るのかどうかを選択しなければならなかった。」 25)

「光の世界に一度入ると地上に戻れなくなるといわれた。」 26)

「この光の世界に一度入ることは、地上の生命の境界を超えることであり、それは死後の命である。」 27) この例は光の世界が物質の世界の命とは別の命の世界であることを示している。

「トンネルの先で光の人格体が、これ以上先に行くと地上の身体に戻れなくなると告げる。」 28)

「海岸線のような境界が私を真の光から分離した。この光に入れば私は自分の体に戻れなくなることが分かった。」 29) この例では光のバリアは海岸線のイメージで表されているが、橋、フェンス、門、川、海、山など様々なイメージでバリアはあらわされている。イメージはさまざまであるが、それが光のバリアを意味している点では共通している。言い換えればバリアという共通の性格が様々なイメージによって表現されている。このことは臨死体験のバリアが、体外離脱した自己意識のエッセンスの思念形態であり、ホログラムであることを示している。この点は次の例からも裏づけられる。

「境界は自分で作り出すものであり、内在的（心的）であって外在的なものではない。」
30) バリアのイメージの典型的な例を引用しよう。

「光の世界の門で私は拒絶された。この境界を越えれば美しい世界があることは分かっていた。」 31)

「約1mの小さなフェンスの空間が、私を光の世界の人々から分けていた。この空間を乗り越えようと、私は二度と地上に戻ることはできない。約1mの空間は物質的な構造ではないが、私と光の世界の人々を隔てていた。来世を彼らと一緒にしたければ、私はこのフェンスを乗り越えるべきだった。」(32)

「光の世界の花がいっぱいの野原にフェンスがあった。このフェンスによじ登って乗り越えかかった時、フェンスの向こう側にいるイエスが私の肩を押さえた。イエスは“今は入ることができない”と言われた。フェンスの向こうはもっと素晴らしいところのように見えた。“向こう側にどうか行かせてください”と私は頼んだ。するとイエスは“ブラドリー、あなたは戻らなくてはならない。あなたにはやるべきことがたくさんある。”といわれた。」(33)

「光の前に大きな門があった。この門を通ると二度と地上にもどれないことがわかった。」(34)

光の世界の中に入る直前に、光の人格体や死者や宗教的人物が「まだ死ぬ時ではないから戻りなさい。」という点でも、臨死体験の多くの事例は一致している。このことも光の世界がバリアになっていることを示している。肉体から解放された自己意識のエッセンスは肉体に再び戻されるということは、自己意識のエッセンスが何らかの仕方で肉体との絆をまだ持っているということを示している。

IV 超意識体と肉体を結ぶ糸

ここで注目すべきなのが、肉体から解放された自己意識のエッセンスが自分の肉体と糸状のもので結びついているという事例がみられるということである。しかもこの糸状のものが切れると二度と自分の肉体に戻るができなくなるといわれている。

川田薫はラットが死ぬとき体重が一瞬のうちに減るのではなく、2分以上かけて徐々に減るという実験上の事実から、生命エネルギーがひものようなもので体とつながっているのではないかと推定している。(35)そして体から生命エネルギーが離脱するとき、このひものようなものが切れなければ、体外離脱になり、意識を備えた生命エネルギーがひもを伝わって天井にのぼり再び体に戻るが、このひもが切れてしまうと元の体に戻るができなくなり死に至ると解している。(36)

湯浅泰雄によれば、不可視のネットワークシステムが心の体と生理的身体を結合していて、このネットワークシステムが心と体や心理作用と生理作用を媒介している一種のエネルギーであり、そのエネルギーが気である。したがって気のエネルギーは心理的性格と物理的性格を併せ持っている。(37)この説が正しいとすると、超意識体と肉体を結合している糸も、気のエネルギーとみることができよう。超意識体と肉体とは本来別のものであるが、糸によって結合されているので体外離脱のように分離することがある。(二元論)もし超意識が自分の肉体と糸で結合されていないとすると、超意識がなぜ他

人の肉体と結合されてしまうということが起こらないのかが説明できないであろう。また超意識体と肉体が糸で結合されていなければ、肉体から解放された超意識体が、なぜ肉体として地上に生きていた時の人生の記憶を保持しているのかも説明できないであろう。さらに超意識体と肉体が糸と結合されていれば、脳を傷害した場合事故の前後の記憶は全くないにもかかわらず、臨死体験の記憶だけは肉の回復後長年にわたって鮮明に残ることも説明できよう。38) 肉体を離脱した後の超意識体の体験の記憶が糸を通じて肉体の脳に伝達されるからである。

D.Goble はちょうどへその緒が胎児に生命を与える母胎と結合しているように、糸は人間の身体と生命を支える魂と結合しており、へその緒が母胎から胎児に栄養分を運ぶように、糸は魂の命にエネルギーを肉体に運んでおり、へその緒が出産時に切れると胎児が母体から独立した人間になるように、糸が死ぬ時に切れると、その人間は肉体から独立した霊的な存在になるとみている。39) 超意識体と肉体を結ぶ糸は、へその緒から連想されたものではないかという疑問には、へその緒はへそと接続しているのに対して、臨死体験の場合は多くのケースでは、糸が頭部と接続しているという事実が反論になろう。40)

気功師の佐藤真志は、「銀色をした光の帯が心臓から頭頂部を抜けて意識体と結ばれている。この光の帯を生命線あるいは電子線と言う。心臓が完全に止まると、レーザー光線のように流れていた光の帯が瞬時に消えると同時に、肉体内にあった意識体が無意識の世界へ移行する。」と自らの体験を記している。41)

超意識と肉体を結ぶ糸を42) すべての体外離脱者がみているわけではない。その理由は R.Crookall が指摘しているように、糸は超意識体の後ろ側に接続していて、引きずられるようについていくので、超意識体が肉体の上に乗る場合、本人が自分の肉体のほうを見下ろさない限り糸は見えないし、超意識体が肉体から離れて移動した場合、本人が自分の肉体を振り返らない限り、糸は見えないためであり、また肉体に戻る場合には、糸はこの戻るというプロセスの中に組み込まれているので、糸を見ることはないためであろう。43)

V 猛スピードでトンネルを通過

M.Niemz が述べているように、特殊相対性理論によると、早く運動する観測者に対して光は主として前方からくる。(サーチライト効果) 光線は束になるので観測者にむかって動くものはすべて、より明るく見えるのに対して、観測者から遠ざかるものは他のすべてより暗くなる。したがって走る方向の前方の中央がその周辺と比べより明るくなる。観測者のサイドにあるものは観測者に向かってくるので、暗いトンネルのように見える。そのために観測者の前方のトンネルの端にある光点が、次第に明るさを増して大きな光となる。44) 肉体から解放された自己意識のエッセンスは、トンネル状の

通路を猛スピードでトンネルの端の光に向かって飛行し、次第に光はより明るく大きくなったという点で臨死体験者の証言は一致している。その時自己意識のエッセンスは質量がなく重力作用もないので、光速に達するまでにスピードアップすることが可能であると思われる。自己意識のエッセンスは光によって引っ張られるので、最後には光速に達し光と一体になるのであろう。事例には「猛スピードで」とともに「光速で」とか「超光速で」という表現がみられるが、光速を体験した人は誰もいないので文字通り正確な表現であるとする必要はない。光速に達するまでに次第に猛スピードで飛行したということであろう。45) 代表的な例を挙げてみよう。「私は光へと引っ張られた。私は開いた入口に押し込められるように感じた。私が穴に入るとピューという音になった。(ドップラー効果に似ていた) 光速でトンネルを下った。歪み効果に似ていなくもない。私は光に囲まれた。」46)

「それから私はトンネルの中に入った。何かうねっているようなトンネルに入った感じがした。真っ暗だった。そのトンネルの向こうに明るい光が見えた。みかんみtainな日が沈む時のように、オレンジ色の太陽の周りに黄色い光が輪になっている。トンネルの端がちょうどそのように見えたわけです。」47)

「突然私は暗いトンネルに気付いた。手術室の出入り口に似ていた。私はトンネルの中に入った。そして遠くの終点に向かってとても速く飛行した。トンネルの先に光があった。それは青い光ではなくあたたかくて黄金の光でとても明るく輝いていた。」48)

「それは真っ黒で遠くに私は信じがたいほど明るい光を見ることができた。初めはその光は特に大きくはなかったが、私が近づくとつれて次第に大きくなった。」49)

「意識を喪失した後の私の最初の記憶は、私が暗いトンネルをスピードで飛んでいることに気付いたというもの。トンネルの先には光があり光に向かって私は飛んだ。突然私はトンネルの端についた。」50)

「私は遠くに光の点を見た。私の周りの黒い塊がトンネルの形を取り始めた。私は猛スピードでトンネルの中を通過した。光に向かって。」51)

「体外離脱後私が通過したトンネルは、長くてすごく暗かった。そこをすごいスピードで通り抜けました。トンネルの向こうには光が見えて、それを見たときすごくうれしかった。」52)

「私は暗い空っぽの空間を通過して移動した。それはトンネルのようであった。とても暗いのでトンネルの直径は1mでも千kmでもあるように見えた。私は次第に早くなり一直線に動いた。私はまるで光速でこの暗闇を通過したかのように感じた。遠くに私は小さな光の点を見た。それは次第に大きくなった。その光が私のゴールであると分かった。それは巨大なとても美しい輝く白光となっていた。」53)

「私は浮遊した。その後トンネルの中に入った。トンネルの中で私は猛スピードで上昇した。壁は黒いので私は不安だった。壁にタッチしようとしたができなかった。ロケットのスピードで私は上昇した。私は遠くの上のほうに白い点を見た。上昇するにつれ

てその光の点は大きくなった。」 5 4)

「私の上の大きな円形の入り口に私は引き込まれる。そして暗いトンネルの端から光がさしているのを見る。それは宇宙の中心であるようである。その光源は地上のどの光よりも明るく輝いていた。」 5 5)

「私は暗いトンネルを通っていた。トンネルの出口に近づくほど明るくなった。」 5 6)

「私は動きたした。私は助けなしにこの不気味な闇の中へさらに進んだ。私はより速くなった。加速するスピードで私が移動したのは巨大なトンネルであった。弾丸のようにこの独特の通路を通過して飛んだ。私はその後光を見た。初めは小さく次第に大きくなった。」 5 7)

「私は猛スピードで前進していた。万華鏡のトンネルの端から小さな光の点が現れた。私とその光の点に近づくほど、その光の点は次第に大きくなった。：ついに私はゴールに到達した。」 5 8)

「私は自分の肉体から抜け出て、巨大な暗いトンネルか通路を飛行しているのに気付いた。以前に見たどの光よりももっと明るい輝く光に向かって。」 5 9)

「重力のない真空のトンネル内を光速か超光速で飛行した。」 6 0)

「その時通路があるのに気が付いたのです。それは長くて暗いようでしたけど、私はその中をものすごいスピードで上昇し始めたのです。そのトンネルを抜けると、優しく素晴らしい愛と光の世界に出ました。」 6 1)

「トンネルの先に光があった。その光に向かって私は猛スピードで吸い寄せられた。」 6 2)

「私はトンネルを猛スピードで光へと向かった。」 6 3)

「私は一つの小さな光の点を前方に見た。前進するとその光の点は次第に大きくなった。トンネルの端から約150ヤードのところ、私はトンネルの四角い端を超えたところの輝く白い光があるのを見た。」 6 4)

「私は見えない力によって、光速以上にさえ感じるほどの猛スピードで動き始めた。私はとてつもない距離を移動し、宇宙の果てしない旅をした。私には体の感覚はなく、ただ一筋の稲妻のように、暗闇の中を光の点に向かって飛行した。その光に近づけば近づくほど、光に到達したいと一心になっていた。」 6 5)

VI 時間の遅れ

特殊相対性理論によると、静止している人間の知覚から見ると、光速に近づけば近づくほど、時計の進み方は遅くなり、光速になると時間は無限に伸びて止まる。光子は常に光速で動くので光子にとって時間は止まったままである。光は時間の外にあり光には過去と現在と未来の区別はなく、永遠の現在のみが存在する。 6 6)

100万光年の星から光が100万年かかってわれわれの目に届くというのは、我々の時計で計測した場合のことで、光子にとっては全く時間はかかっていない。我々の時計では宇宙背景放射の光子は、ビッグバン以来137億年の旅をしているが、光子自体にとってはビッグバンも我々の現在も同時である。67) 光そのものには生成(変化)というものはなく、ただ存在するのみである。

M.Niemz が言うように、肉体から解放された自己意識のエッセンスが光速へと加速されると、光と同じ状態になり、地球上の人間から見ると時間は無くなっている。68) 永遠というのは時間が際限なく続くことではない。(これは重度の痴ほう症の老人にとっては地獄であろう。) 永遠とは時間そのものがなくなることである(永遠の現在) エントロピーの法則から逃れることのできない物質の世界から解放されるので、時間が無くなれば、誕生—成長—老化—死の連鎖は無くなる。(生死を超える) 不死ということは命が永続するという事ではない。不死の命は持続するものではない。それはただ存在するのみであり存在そのものに他ならない。また光の世界では自己意識のエッセンスは、過去も未来もすべて現在なので、過去も未来も現在体験できる。過去と未来の事象も光の世界ではすべて現在同時に生じる。69)

VII 距離が縮む

特殊相対性理論によれば、観測者に向かって運動する物体は静止している観測者から見ると、光速に近づけば近づくほど飛行方向においてその長さが縮まる。光速に達して光と同じ状態になれば距離はなくなる。光自体にとっては物体の長さとか、ある地点から他の地点までの距離というものは存在しない。70) 電磁波は宇宙のいたるところに遍在しているか、宇宙のすべてのものに接触しているかのいずれかである。71) 光そのものにとって位置と場所というものはない。光はただ存在するだけである。72)

M.Niemz も指摘しているように、肉体から解放された自己意識のエッセンスは、光速へと加速され光と同じ状態になれば、自己意識のエッセンスにとって物体の長さはなく、目的地までの距離もなく、瞬時にして目的地に存在できる。73) これはテレポーテーションではない。なぜならば場所の移動は一切していないからである。また光の世界では時間と空間のバリアがないので、すべてが分離できない仕方で一体になっていて、他者とも即時にコミュニケーションできる。74) 光は時間と空間のバリアを超えていて、物質界の外にある。75) 光の世界ではすべての事象がいたるところで現在同時におこる。76) 空間上どこにいる人格体とも、時間上過去と未来の人格体ともいつでもコンタクトが取れる。77)

引用文献

- 1) A.J.コールマン、相対性理論の世界、89～100、講談社、1995；本間三郎、

超光速粒子タキオン、21～40、講談社、1982

- 2) Lucy mit C,57, Edition BOD,2005
- 3) K.Ring, Lessons from The Light,18, Insight Books, New York,1998
- 4) 高木善之 転生と地球、108～109、PHP 研究所、1997
- 5) 本間三郎、タキオン、46；広瀬起成、超ひも理論と「影の世界」、139、講談社、1989
- 6) M.Niemz, Lucy,56
- 7) R. ラッカー、隠された世界、幾何学？・4次元・相対性、114、白楊社、1981
- 8) www.nderf.org/israelnde.htm
- 9) www.nderf.org/karenH7snde.htm
- 10) R.A.Moody, Life After Life,18, Bantam Books, New York,1976
- 11) K.Ring & M.Lawrence, Further evidence for veridical perception during near-death, JNDS vol.11 no.4,227,1993
- 12) J.C.Wintek, A Precious Encounter on the Other Side,47, Dogwood River Publishing, Kentucky
- 13) S.S.Farr, What Tom Sawyer Learned from Dying,26, Hampton Road Publishing Company, Norfolk,1993
- 14) www.nderf.org/john_f's_nde.htm
- 15) www.nderf.org/peter_r's_experience.htm
- 16) www.nderf.org/karol_s'snde.htm
- 17) www.aleroy.com./derry_bresee'snde.html
- 18) www.nderf.org/derry'snde.htm
- 19) www.nderf.org/jerry_b'snde.htm
- 20) A.E.Yensn, I saw Heaven,14,1955
- 21) D.Goble, Near Death Experience, www.artnet.net.
- 22) R.Wallance, The Burning Within,102, Gold leaf press,1994
- 23) K.Ring, Lessons,14
- 24) www.nderf.org/tawnie_m's_nde.htm
- 25) S.S.Farr, Tom Sawyer,29.37
- 26) www.nderf.org/rosemary's_nde.htm
- 27) www.nderf.org/judel's_nde.htm
- 28) M.Morse, Closer to the light,154, Vilard Books, New York,1990
- 29) M.Morse, Closer,153
- 30) www.nderf.org/jereme's_nde.htm
- 31) www.nderf.org/greg's_nde.htm

- 3 2) www.nderf.org/anne's_nde.htm
- 3 3) www.nderf.org/bradelyn_w's_nde.htm
- 3 4) www.nderf.org/corina's_nde.htm
- 3 5) 生命の正体とは何か、160、河出書房新社、1997
- 3 6) 生命、164～165
- 3 7) 宗教経験と身体、133、岩波書店、1997
- 3 8) 拙論、脳死と臨死体験の記憶、人体科学、11巻2号32～34,2002
- 3 9) Through the Tunnel,129,S.O.U.L.Foundation,Palm Harber,1993
- 4 0) 超意識体と結ばれている糸が肉体の丹田と接続している例もある。
- 4 1) 気がおよぼす心身への影響、34、たま出版、1995
- 4 2) R.Crookallによると、糸を見た人は、自然発生の体外離脱では20%、意図的な体外離脱では16.2%である。(Astral Projections,146,Aquaria Press,London,1964)
- 4 3) Case Book of Astral Projection,113~114,Citadel Press,1998;Out of Body Experiences,Citadel Press,109,1992
- 4 4) Lucy,32.38
- 4 5) Lucy,44~45
- 4 6) www.nderf.org/richard_l'snde.htm
- 4 7) M.セイボム、あの世からの帰還、63～64、日本教文社、1986
- 4 8) L.Nelson & Nelson,R.,Near Death Experiences,113,Springville,UT,Cedar Fort,1994
- 4 9) R.A.Moody,Life,62
- 5 0) A.S.Gibson,Echoes from Eternity,185,Bountiful,UT:Horizon,1993
- 5 1) B.Eadie,Embraced by the Light,40,Placeville,CA:Gold Leaf Press,1992
- 5 2) R.ムーディ、光の彼方に、82、TBSブリタニカ、1990
- 5 3) K.Ring,Lessons,14
- 5 4) Y.Eck in Eah-Todeserfahrungen,80,Flensburger Hefte,51,1995
- 5 5) Ian McCormack.www.aglimpseofeternity.org/testimony.doc.
- 5 6) G.Ewald,An der Schwelle zum Jenseits,42,Matthias Gruenewald Verlag,Mainz,2001
- 5 7) E.Winkler,Begegnung mit dem lebendigen Licht,40~41,Silberschnur,2001
- 5 8) K.Ring,Lessons,296
- 5 9) L.Nelson & Nelson,R.,Near death Experiences,165
- 6 0) S.S.Farr,Tom Sawyer,26
- 6 1) R.ムーディ、光の彼方に、133
- 6 2) B.イーディ、死んで私が体験したこと、67、同朋舎出版、1995

- 6 3) [www.nedrf.org/leslie m's nde.htm](http://www.nedrf.org/leslie%20m%27s%20nde.htm)
- 6 4) M.Morse,Closer,141
- 6 5) [www.nderf.org/lana'snde.htm](http://www.nderf.org/lana%27snde.htm)
- 6 6) E.チェイソン、らくらく相対論入門、73、講談社、1991 ; G.C.Schroeder,The Science of God,164,Free Press,New York,1997
- 6 7) J.グリビン、シュレーディンガーの猫、57、地人書館、1992 ; A.M.ヤング、われに還る宇宙、15、日本教文社、1988
- 6 8) Lucy,61
- 6 9) 拙論、時間と空間の分離を超える意識、人間文化研究、12号、5~8,2003 ; 4次元空間と臨死体験、人間文化研究、9号、4~14, 2000 ; 5次元世界のモデルと超意識体、人体科学、14巻1号、44,2005
- 7 0) チェイソン、相対論入門、65~67 ; M.Niemz,Lucy,77
- 7 1) R.L.フォード、SFはどこまで実現するか、238、講談社、1989 ; J.グリビン、シュレーディンガーの子猫たち、109~110、シュプリンガー・フェアラー東京、1998
- 7 2) R.Weber,Dialogues with Scientists and Sages,47,Routledge & Kegan Paul,London,1987
- 7 4) 拙論、時間と空間、9~10 ; 5次元モデル、43 ; ホログラフィック宇宙と臨死体験の世界、人間文化研究、11号、39~42, 2002
- 7 5) A.M.ヤング、還る宇宙、16 ; R.Weber, Dialogues,46
- 7 6) A.ザイエンス、光と視覚の世界、316、白楊社、1997
- 7 7) 拙論、時間と空間、10~11